

日本赤十字病院の戦前の海外における 事業展開と現在（朝鮮編）

福永 肇

埼玉学園大学 経済経営学部 経済経営学科

【はじめに】 戦前の日本は海外にて積極的な病院展開を行っていた。日本が病院を開設した地は、台湾、朝鮮、中国、関東州、満州、樺太、香港、フィリピン、シンガポール、蘭印、ビルマ、パラオ、ブラジル、ハワイと広範囲にわたる。現在とは比較にならないほど医療はグローバルであった。敗戦後に日本が海外から撤退する過程で、病院の記録は焼却や置去・散逸になる。GHQ占領下の日本には外交権はなく、引揚げて来た海外の病院のを知ることは出来なかった。今日、戦前海外にあった日本の病院のことを知ろうとしても史料は多くない。日本の帝国主義時代における占領地施策には功罪の両面があるであろう。しかし日本が海外で提供した医療への客観的評価を行うためにも、当時の海外での病院活動を調査研究し、その後の戦後展開も含んで整理・記録しておく必要があると考える。海外での病院の例として、今回は朝鮮半島における赤十字病院の歴史を報告する。

【目的】 日本統治時代に朝鮮で日本赤十字社が行った病院事業、および戦後の赤十字病院の展開を調査し、朝鮮半島における赤十字病院の歴史を知る。

【方法】 朝鮮の赤十字病院に関する参考文献には、韓国の大韓赤十字社による『大韓赤十字社七十年史』（1977年）や毎年の『年報』がある。しかしハングル文字表記で活用できなかった。日本語、英語での資料は発掘出来なかった。そこで大韓赤十字社本部、ソウル赤十字病院、国立ソウル大学医学歴史博物館を往訪して現地調査を行い、朝鮮における赤十字病院の歴史を整理した。

【結果】 20世紀の朝鮮半島は、李氏朝鮮、日本統治、米ソ軍政、朝鮮戦争、南北分断という歴史を辿っており、それに伴って赤十字病院の歴史も複雑であった。簡潔短絡に整理すれば以下の時系列になる。朝鮮では大韓帝国時代の1906年に大韓赤十字社が設立され、「大韓国赤十字病院」がソウルに開設された。翌1907年に医学校、廣濟院と合体再編して「大韓醫院」になる。（大韓醫院はその後、京城帝国大学附属醫院、京城大学附属病院を経て、1948年に国立ソウル大学の附属病院になり、今日に至る。ただし国立ソウル大学の校史は大学や附属病院は新しく開設した組織で、戦前にあった大学や病院の後継とはしていない）。1910年の日韓併合によって大韓赤十字社は日本赤十字社朝鮮支部に再編される。1926年、ソウルに「日本赤十字病院」が開設され、1942年に「京城赤十字病院」に改称。この病院が現在の韓国の「ソウル赤十字病院」になっている（ソウル赤十字病院は自院の開設年を1905年としている）。朝鮮戦争の後、朝鮮半島の赤十字社は大韓赤十字社（韓国）と朝鮮赤十字社（北朝鮮）に分断した。韓国では赤十字病院が全国に配置され、最盛期には16病院+2病院船を運営する。韓国は病院間競争が熾烈で、経営環境は厳しい。赤十字病院は経営合理化により、現在6病院に縮小している。北朝鮮には平壤に日本統治時代に開設された「朝鮮赤十字病院」があるが、情報入手は出来なかった。

【考察】 大韓帝国時代に設立された大韓国赤十字病院は翌年に再編され、今日では国立ソウル国立大学病院になっている。戦前の朝鮮半島における最大級の病院であった日本赤十字病院は、現在はソウル赤十字病院として医療提供が承継されている。研究過程で、韓国では赤十字病院への政府補助金対象は設備投資だけで納税義務もあることを知った。公的医療機関の指定を受けて非課税である日本赤十字病院の経営基盤とは根本的に相違しているとの知見を得た。

【結語】 赤十字社が病院事業を行っている国は少ない。現在は日本（病院数91）、韓国（6）、北朝鮮（1）、中国（若干）、タイ（1）、南アフリカ（1）である。日本がアジアで開設した赤十字病院は、戦後も各国での赤十字社（紅十字社）の活動の一つとして継承され、医療提供を行っている。この病院事業は世界の赤十字社の中では異色の活動になっている。